

沖縄の暴走族の文化継承過程と〈地元〉

——パシリとしての参与観察から——

打越 正行

karp@mail.goo.ne.jp

社会学では、小集団で展開される対面的相互行為の多様性や、その多様な現実を行為者が認識する際に用いる枠組の可変性が議論されてきた。それに対して、本稿では対面的相互行為が小集団にある資源とその集団の規模によって支えられていることに着目する。それによって、対面的相互行為の多様性や枠組の可変性は、小集団の資源や規模といった〈土台〉によって規定されていることを示す。

現在の沖縄の暴走族少年らは、家族、学校、地域に必ずしも安定した基盤を持たず、加えて労働市場では流動的な労働力として扱われる。そのような彼らが、行き着く場所である〈地元〉が、直接的相互作用を支える資源と規模を備えた〈土台〉になる過程を、そこで展開される文化の継承過程をもとにみる。

まずは彼らが〈地元〉に集まり、さまざまな活動を展開する際に必要最低限の資源に着目する。最終的に〈地元〉に行き着いた彼らは、共有する文化や物語以前に、まずはそこに継続的に集うための資源が欠かせない。続いて、それらの資源を有効に用いるために、〈地元〉が適切な規模にあることに着目する。それらの資源はもともと廃棄物か流通品であったが、〈地元〉にあることによって、有効な資源となる。よって、規模が適切でないと、それらの資源は再び無効化されてしまう。以上のような実体的な資源と規模を備えた〈土台〉によって、〈地元〉における彼らの対面的相互行為は支えられていることを確認した。

キーワード：暴走族、〈地元〉、沖縄

1 はじめに

本土¹⁾の荒れた成人式が沈静化する一方で、沖縄の成人式はいまだに荒れている。出身中学校ごとにお揃いの袴を纏い、一升瓶の泡盛片手に国際通りに繰り出し、それを警察が静止する光景は毎年恒例となっている。それを実行しているのは、平日・週末を問わず、沖縄の深夜の「ゴーパチ（国道58号線）」を盛り上げている暴走族²⁾であり、それを支えるのは暴走族を見物するギャラリーの若者の多くである。暴走族少年の多くは、建築現場で働いており、1週間の鬱憤を暴走行為で発散させる。それに加え、暴走行為は、仲間から一人前の暴走族とみなされる通過儀礼でもある。また早朝まで暴走族を追いかけるギャラリーの若者の多くは、無職中かキセツ（季節労働）³⁾帰りの求職中の若者である。荒れる成人式の背景には、毎晩のように盛り上がるゴーパチの日常がある。またその日常も、暴走族の低賃金かつ厳しい、もしくはギャラリーの流動的かつ不安定な沖縄独特の就労構造と、それともなう就労先における通過儀礼の機能不全に支えられている。

ただこれらの困難を沖縄の若者の一部は、建築現場、エイサー青年団、暴走族などの場所をもとにした実践を通じて、部分的に緩和してきた。例えば、学校や家族、安定した就労環境から弾き出された中学生が暴走族に入り、〈地元〉⁴⁾のアジト（バイク倉庫）に通うなかで文化や規範を身につけながら、一人前の暴走族少年へと社会化され〈地元〉建築業に就くといった過程にそれを確認した（打越 2008, 2009）。また沖縄の暴走族少年らは、アジト以外にもコンビニ前の駐車場やマクドナルドなどに毎晩のように集う。そのような場所としての〈地元〉を、中学校校区規模の同世代の若者らが一定期間にわたり集う実体的な場所としておこう。そのような実践と場所の関係を、今までは〈地元〉で形成されるメンバーの代替不可能性（かけがえのなさ）に注目して考察してきた（打越 2008）。ただそこには少なくとも2つの留意すべき点がある。

1つ、〈地元〉は無条件にすべての若者を引き受ける理想郷ではない

し、また〈地元〉自体が今後も安定して継続する保証はないという点。これについては、これまでに〈地元〉から若者が弾き出される過程について考察を重ねてきた（打越 2010）。それにもとづけば、〈地元〉は包摂と排除の機能を併せ持つことでなんとか維持されている。本稿では、よりミクロな視点にもとづき、そこでの直接対面的な相互行為が継続的に展開され、文化が形成され継承される過程を検証する。2つ、〈地元〉が実体的な場所であることと、そこで実践が展開されることでメンバーの代替不可能性が形成されることの間には、幾重にもわたる過程をふむ必要があるという点。本稿はその過程を詳細な事例を積み重ねる形で説明を試みる。〈地元〉に集う若者は、支配社会への対抗的な視角や、暴走やその見物を行うという明確な目的、また特殊な能力を必ずしももっているわけではない⁵⁾。また多くの暴走族は、規模こそ中学校区であるが地縁や血縁だけで構成されてはいない。そのような、目的や能力、そして生得的なつながりを持たない若者が、地元集い、そこで対面的相互行為が継続的に可能となることで、代替困難なメンバーとなっていく過程を、以下では具体的にみていく。

2 調査方法——パシリとしての参与観察

本稿の中心となる調査は、T村の暴走族とそのリーダーの社長が経営する同じくT村の建築業である沖組を対象として、2007年から2011年までの間の合計6ヶ月間にわたって実施した参与観察である。著者はパシリ（使い走り・雑用）として建築業の現場はもちろん、暴走族のアジトにおいても与えられた役割を遂行した⁶⁾。パシリとして活動に参加しながら調査を進めたことは本稿の展開にとって重要な役割を果たすため、まずここではパシリの活動について説明し、それによって得られる調査の利点について述べておく。

基本的にパシリとは、先輩の要求や命令に従い雑務作業を遂行する役割である。しかし、雑務作業をこなすだけではパシリとしての完成度は高いとはいえない。それに加えて、パシリは馬鹿にされ笑いの対

象にされるために、定期的に命令をしくじることが重要であった。しくじった後に、命令した先輩が「どうしようもないなこいつ、面倒みてやるか（俺がみなかったら誰もみないだろ）」と感じれば、それは完成度の高いパシリといえる。もし対照的に、パシリが命令を完全に遂行したら、要求や命令は徐々に拡大していき面倒をみられることはないだろう。著者は今までに広島市では18チーム、沖縄では26チームの暴走族に調査を実施したが、比較的忠実にDVD作成や写真撮影などの役割を遂行したチームは、残念ながら調査後に音信不通となってしまった事例が多い。他方で、真摯に役割を進める過程で残念ながら失敗し、迷惑をかけてしまったチームは、現在でも親交がある。そこでは失敗のエピソードが再会するたびに再び語られることで、関係をつなぎとめる役割を果たしている。調査中に調査者が被調査者やその属する集団においてある役割として代替可能か、もしくは代替困難な存在かといった点は、本調査を展開するにあたり重要なポイントであった⁷⁾。そしてその分かれ目を決定付ける主な要因は、以下で詳述するように、〈地元〉の規模にあった。〈地元〉が大きすぎず、メンバーの流動性にある程度の制限があること。これによって、パシリのしくじりが排除の契機とならずに、1回性の「歴史」として蓄積される。またそこには、既存のメンバーでなんとか〈地元〉をまわそうとするブリコラージュの思考を確認できる。

またパシリとして調査に加わった利点は、2つある。1つ、大学生やカメラマンと比較してより多くの少年に、そしてより深く関与できるためである。ある集団を見る際には複数の被調査者からの語りをもとに羅生門的な調査法が有効である。上下関係の厳しい暴走族で先輩たちに取材許可を得るだけではなく、後輩たちに認められることではじめて、この方法は有効となった。2つ、長期にわたるアジトの日常の過程で、自らも社会化を経験することで、当初はなんでもないようにみえていた資源や振る舞いの意味を、パシリとしてのしくじりを通じて、再文脈化して考察が可能となった。これは、コミュニティの臨界領域にある〈地元〉で、廃棄物や流通品の再資源化や、特殊な能力

を往々にして持たずに流動的に移動を繰り返す若者が、〈地元〉で代替不可能な存在となる／なれない過程に注目する本稿の意図と合致する。

なお、深夜の未成年との談笑やアジトでの賭博行為といった本調査における触法行為について説明しておく。いうまでもなく、社会学が研究の対象とする社会は、法に囲われた社会のみではない。そのうえで、社会調査において重要な点は、調査対象の社会が法の内部か外部かではなく、何を明らかにするために、何を対象とし、どのような方法と立場で問題にせまるのかについての自覚的態度であろう。本稿に適用すると、〈地元〉が資源と規模を備えた〈土台〉となることで、メンバーの対面的相互行為を支える過程をつかむために、沖縄の暴走族のアジトを対象に、暴走族のパシリという立場での参与観察が有効であるということになる。また本稿で用いる固有名はすべて仮名である。

3 沖縄の暴走族

まずは、沖縄の暴走族の概要を紹介したうえで、以下の議論を展開していく。沖縄の暴走族の全体像をまとめたのが、次頁の表である。

伝統階梯型暴走族は、上下関係が厳しく〈地元〉の人間関係による拘束がきつい反面、先輩によって後輩の就学や就労まで徹底的に世話をみる点で、かつての本土の暴走族と大きく重なる。それと比較して本稿で扱う場所集合型暴走族は、成員の入れ替わりの多さと、関係性が水平型と垂直型の並存である点が特徴である。〈地元〉の建築業と密接な関係にあるが、そこで安定して働く者は半数に及ばない。また半数近くがT村出身者以外から構成されており、メンバーの移り変わりも多い。家族、学校、就労世界、そしてトラブルなどにより出身地からも追いやられた若者にとって、この開放性と就労斡旋は魅力に映るのであろう。短期世代型暴走族は、場所集合型暴走族と比較してその年齢幅の狭さが特徴的である。これによって、組織は水平型の形態をとる。ただ友好的で気軽に過ごせる一方で、カリスマ的なリーダーが不在である。また具体的に集まる場所は、マクドナルドやコンビニとい

表 沖縄の暴走族の類型

暴走族の類型	伝統階梯型	場所集合型	短期世代型
集団の規模	20-30 名	20-30 名	20 名前後
世代	15-30 歳	15-30 歳	15-20 歳
主な就職環境	先輩が立ち上げた バイク屋	〈地元〉の型枠解体屋 仲間と行くキセツ	求人誌でみつける キセツ・短期バイト
世代間の文化伝承	可能	可能	一部不可能
メンバーの移り 変わり	少ない	多い	少ない
〈地元〉出身者の メンバー構成率	100%	50%	80%
集合場所	バイク屋	バイク倉庫	マクドナルド コンビニ駐車場
つながりの強度	きつい	ふつう	ゆるい
組織形態	垂直型	垂直型と水平型	水平型
全体の構成比	約 10%	約 40%	約 50%

った暫定的な場所であり、取締りの対象となり不安定である。それによって、世代間の文化伝承や就労の斡旋等が組織的に展開されておらず、この地区では、エイサー青年団が解散した。このように分類される暴走族は、徐々に伝統階梯型から、場所集合型、そして短期世代型に移りつつある⁸⁾。本稿は場所集合型と短期世代型暴走族に注目するが、それはその変遷の現代的意味をつかむことを目指すためである。

本稿で中心的に扱う沖縄連合は、T村を拠点とする過去10年以上続く伝統的な暴走族である。このチームはメンバーのバイクを収納する倉庫（通称、アジト）を10年以上にわたり賃貸して活動を展開している。沖縄の暴走族のすべてが、このようなバイク倉庫を賃貸しているわけではないものの、上の表で示したようにそれぞれの暴走族は組織形態や活動に適合的な集合場所を持つ。

沖縄連合のアジトは誰もが出入りできる場所ではないという点で排他的である。ただいかなる組織においても、組織を継続させるためにはある条件やそれにもとづく排他性を併せ持つ。そうであるならば、その条件が実行される場面やその条件が構築される過程に注目することが得策である。暴走族のアジトは、以下の2つの事実を前提とした排他性であった。1つ、この排他性はバイクが嫌い、上下関係を軽視するといった形で、ヤンキー・サブカルチャー⁹⁾への拒否反応がないという比較的緩い条件によるものである。仮にヤンキー・サブカルチャーを身に付けていなくても、その後〈地元〉で先輩に教わって身に付けていくことになるので、あまり心配する必要はない。2つ、それは暗黙の内にとられる定員による排他性である。ただ定員といっても、明文化され、厳格になされているわけではない。それより小さいと活動が十分に展開できないし、またそれ以上新参加者が加われば十分なシゴキを受けられず、それゆえにトラブルを起こし叱責されて自然に去っていくというなかで、暗黙の内にてきあがる定員である。その結果、〈地元〉の暴走族は、上述したように近隣中学の規模が適当な大きさとなっている。最終的にはそれぞれの世代が多くて2名程度に絞られていく。調査の過程で出会った多くの暴走族は、年齢構成は多様であっても、メンバー数は20-30名に落ち着いていた。

このように〈地元〉の排他性は、上の条件さえ満たせば〈地元〉で生き続けることができるという意味での条件付きの排他性である。その条件は、ケンカに強いこと、バイクの技術の有無、また外見や服装がイケている（格好いい）ことなども重要であるが、長期的にみれば〈地元〉に最も顔を出した新参加者がその世代に残る者となっている。なぜなら、いつも顔を出す過程で〈地元〉の先輩への対応、ヤンキーうちなーぐち、そして暗黙のルールなどを体得していき、〈地元〉にとどまる術を獲得できるようになるからである。このように〈地元〉は外部からの観察や新参加者からみれば排他的であるが、同時に頻りに顔を出すメンバーや長期的視点に立てば開放的な場所であり、そのような社会化の仕組みによって活動を支えるメンバーの半数以上はT村出

身者ではないという点で多様である。またある〈地元〉であふれたとしても他の〈地元〉に加わる若者もいることから、その排他性は暫定的なものである¹⁰⁾。つまりこの排他性は、〈地元〉を維持するために構築された「間引き制度」と考えられる。沖縄連合の概要と沖縄の暴走族の組織の特徴をふまえ、以下では〈地元〉の形成過程において、いかに資源が有効に使用されているのかをみていく。

4 最低限の資源が〈地元〉にあること——〈地元〉の形成過程 I

ここでは、〈地元〉が形成する過程において、最低限の資源が〈地元〉にあるという事象に注目する。当然のことではあるが、これは〈地元〉が小さくなり解体しないために重要である。特に誰がどのような過程で資源を調達し、それが（無効化、垂れ流しされずに）アジトでどのメンバーにいかに有益に使用されているのかをみることは、本稿の問題関心と重なる¹¹⁾。

ここでいう〈地元〉の資源とは、具体的にはバイクの修理、改造のための工具、オイル、スプレー、また時間つぶしのできるダーツマシンやトランプ、テレビ、暴走族雑誌や DVD など、そしてそれらを合法的に保管できる倉庫をさす。バイクこそ一応は個人の所有物であるが、実際、所有者はバイクを改造する権利があるのみで、社会化を経験したメンバーであればバイクの貸し借りは自由である。そのために、鍵は常にバイクに装備され、燃料は常に空の状態に保管され、乗る者が補充して乗るシステムになっている。また倉庫の賃貸料の 4 万 2 千円は数名の先輩たちで賄っている。

そしてこれらの資源は、それぞれのメンバーが提供するものもあるが、工具やダーツマシンやトランプ、雑誌類のようにリーダーの裕太に¹²⁾個人による寄付によるものがほとんどである。正確にいえば、彼の寄付とは、近所の飲み屋で故障したダーツマシンや、2 階の米軍家族が置いていったテレビを引き取り、設置したものである。または彼が働く解体屋から無断で拝借したものである。これらの物質

的資源があることが、なにより〈地元〉をまわすためには欠かせない。これらのなんでもない廃棄物や流通品が、アジトに配置されることでメンバーの社会化を支えている。そして、これを可能にする要因こそ、裕太に―にが 10 年間にわたり解体屋に従事し、経済的な資源にやや余裕があり、それによって配偶者との関係が比較的安定しているという事実である¹³⁾。そのような資源と時間の剰余分が〈地元〉に蓄積した結果、沖縄連合は実体的な場所であるアジトを所有するに至った。

このような資源とその調達メカニズムによって、〈地元〉のアジトは支えられている。そしてそこに、T 村だけではなく近隣地区の若者が毎晩集う。ここでは、最低限の資源によって〈地元〉のアジトが合法的かつ比較的安定して維持していることを確認できる。そしてこの時点では、どこにでも形成しうる〈地元〉という場所が、そこにメンバーが集い、対面的相互行為が展開される過程で、メンバーの社会化とその代替不可能性を生み出すに至る。その過程を詳しくみていこう。

4.1 安定する〈地元〉——沖縄連合の場合

沖縄連合は、15 歳から 30 歳までの約 30 名の少年が属する暴走族である。そのうち毎晩 10 名あたりがアジトに集まる。だいたい午後 10 時から 11 時に集まり始め、朝方まで誰かがいる。携帯で連絡を取り合って集まるのではなく、アジトに行ってみれば誰かがいるという感覚で集まる。アジトの概略は次頁の図に示した。沖縄連合は 2009 年に集団暴走で一斉に逮捕・補導され、それを契機にアジトの場所を変更した経緯がある。それからアジトへの警察による捜査を警戒しており、バイクの出し入れ以外は正面のシャッターを開けることはない。正面側からはただの空店舗を装っているために、シャッター前でたむろすることも禁止されている¹⁴⁾。そのようなアジトで、行われる活動にギャンブルと暴走族談義がある。それらの活動を上述した資源との関係に注目しながらみていこう。

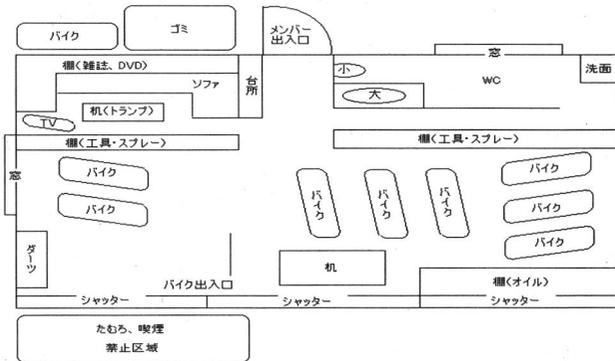


図 アジトの見取り図（一部変更）

4.1.1 ギャンブル

アジトで行われるギャンブルには、ダーツとトランプがある。ダーツの掛け金は 100 円から始まり、盛り上がってくると 500 円まであがる。それらは、ある程度のメンバーが集まる前の数名で行う時間つぶしに丁度いい。まずダーツは、技術がその結果に影響を与えるギャンブルである。ゆえに、ダーツの能力と沖縄連合の年齢階梯はほぼ一致する。結果として、ダーツは先輩が支払う倉庫代を後輩から徴収し、その割り当てを平均化する機能を果たしている¹⁵⁾。続いてトランプは沖縄連合独自ルールの大富豪やスピードというゲームが行われる。掛け金は常時 100 円である。そのルール習得も新参者にとってはアジトに出入りするためには必須科目のひとつである。当初は先輩の人数合わせやカモであった新参者が、だんだんと存在を認められ、顔を認知され、名前（通称）を与えられていくのが、このトランプである。

上のダーツが『Street Corner Society（以下、SCS）（W. F. Whyte 1943=2000）』におけるボーリングのように、その順位と組織内での力関係が対応しているのに対して、ここでのトランプにはそのような対応関係は見出せない¹⁶⁾。むしろ毎晩通うなかで見えてきたのは、トランプが普段の先輩－後輩関係をひっくり返す非日常を生み出すギャンブルであるということである。その結果、運良く（悪く）先輩に勝つ

てしまった新参者は、存在を認められると同時に先輩からのトランプの誘いを次から断れなくなる。このような日常と非日常の循環を経て、新参者はアジトに常連メンバーとして通うようになっていく。

ここでは、アジトの資源によって新参者がとりあえずそこにいてもいいという安心感を生み出し、そこで他のメンバーとの対面的相互行為が生まれている。またこれをより安定化させるのが、沖組体験という通過儀礼である。沖組は裕太に一の父親が経営する型枠解体屋である。毎晩のようにアジトに通うようになると、ギャンブルの資金調達のために沖組への斡旋が行われる。著者も経験したこの通過儀礼は、仮に継続的に働くことができれば、その勲章と給料を得ることでよりアジトに溶け込める。対照的に沖組を数ヶ月で挫折しても、先輩たちの半数以上が挫折したため、その出来事もメンバーの「歴史」として蓄積されていく。

4.1.2 暴走族談義

ダーツなどのギャンブルをしながら、徐々にメンバーが増え盛りあがってくると、隣の部屋で昨晚の暴走族の様子をいつものコーヒー牛乳¹⁷⁾を飲みながら振り返る暴走族談義が始まる。昨晚暴走した者はその武勇伝を自慢げに語り、見物をした者はその批評を行う。

〔昨日は暴走したの?〕もちろん、おまえどこ行ってたば?〔昨日はE市行ってました。沖縄連合みなかったっすね。すれ違いですかね〕だーる(そうかな)。昨日、みんなでC市まで行ったらよ、いきなり(パトカーに)わーぎられて(追いかけて)から大変だったよ。昨日のはしつこかった、やっさー。D市までついてきてからよ。C市の(パトカー)はしつこいばーよ。〔どこのパトカーとかわかるの?〕わかるさー、パトカーの運転がうまいやつ(警官)と、そうでないやつがいるさー。〔へえー、そこまでわかるん?すげえな〕前回捕まえられたやついたら挑発しまくるしな(笑)〔そこまでわかるん?〕あたりまえさー。(良夫 2007)

年 11 月 13 日深夜, D 市内のコンビニ駐車場)

[最近は(取締りが厳しいので)警察が気合はいつてるんじゃない?] 違う, 暴走族の気合が足りない, 暴走族は本気になれば警察は何もできないよ.[ほんとによ?]あたりまえさー(大山 2007 年 12 月 1 日深夜, D 市内のコンビニ駐車場)

このように彼らはアジトで自らのもしくは仲間の暴走を語り合う。ただそこで語られる昨晚の暴走とは, 卓越した伝説となる走りばかりではない。例えば, 琉球連合の雅史さんのフカシ(エンジン音)の技術や D 市の大山が那覇から北谷までウィリー走行(前輪を浮かし後輪だけで走行する技)をしたなどの「伝説」は確かにある。ただそれらと比較したら, 毎晩行われる暴走行為のほとんどは物足りないものが多い。しかしそれにもかかわらず, 直接に暴走し見物した者はそれらとの比較ではなく, 1 回限りの暴走としてそれを楽しんでいる。

またこの批評において, 警察の役割が重要な位置を占めている。彼らにとって警察は絶対的存在ではなく, 時々は逃亡もできるし, 職務質問を強引に追い返したり, かわしたりできる存在とされている。そのことは, 実際に経験することもあれば先輩から伝えられることである。著者も調査中に警察から免許証の提示をよく求められ, そのなかで数回トラブルになることがあったが, そんな時に知り合いの少年が両者の間に入ってなんとか最悪の事態を脱してくれたことがあった(2007 年 11 月 20 日, E 市コンビニ駐車場)。また F 市の暴走族 OB の山城たちとコンビニでたむろしている際に, 私たちに数人の警官が職務質問を行った。実際のやりとりはすさまじい速さのうちなーぐちであったために, ほとんど理解できなかつたが, 山城は, すごい勢いで警察を追い払った。彼は警察の言葉遣いが悪かったことを徹底的に追及し最終的には謝罪に至らせた(2007 年 10 月 21 日, E 市交差点)。

このようにやり方次第で結果が異なってくる警察とのやりとりは, (地元)における仲間との語り合いにおいて格好の素材となる。警察

とのやりとりに従順に対応した者は馬鹿にされ、反抗した者は一目おかれる。ただどちらにせよ、これらの1回限りの「歴史」は、〈地元〉の仲間によって語り継がれていくものとなり、ことあるごとに思い返されるものとなる¹⁸⁾。そしてこれらの1回性の「歴史」を蓄積し記憶するために、T村のアジトの存在は大きい。コンビニ前の駐車場やマクドナルドでは毎晩のようにギャンブルはできないし、また暴走族談義はできたとしても、警察や店舗の判断により立入り禁止になる可能性は払拭できない。それに対して、賃貸契約のアジトはその心配がなく安定している。その結果、比較の俎上に載せるとなんでもないような1回性の「歴史」であっても、〈地元〉の具体的なつながりを介することで、それらはあるメンバーを象徴するものとして、蓄積され継承される。

4.1.3 〈地元〉における社会化

ここでいう〈地元〉における社会化とは、ヤンキーうちなーぐちや、バイク改造や操縦の技術習得といった暴走族文化の習得に加えて、時間的・空間的な俯瞰の視点を、実体的な〈地元〉を基盤として獲得することでもある。前者は新参加者が暴走族に加入する際に必須の営みであるのに対して、後者は〈地元〉に安定して基盤をおき外部社会からの影響を相対化させるために有効な営みである。

暴走族のアジトで社会化を経たメンバーは、アジトの現状やメンバーの動きを俯瞰してみる視角を獲得するに至る。具体的には、働いていない他のメンバーの金銭的な振る舞いがよかったり、あまりアジトに顔を出さなくなったりすると、女性関係や「危ない¹⁹⁾」人間関係のチェックが可能となる²⁰⁾。また、安定して働くメンバーには、執拗にギャンブルに誘うことができる。ここで金銭の流れをもとに俯瞰の視点の獲得がなされている点も重要である。

著者「(アジトの机にあるDVDをみつけて) このDVD, 新しいやつじゃないですか。貸してもらっていいですか。」

裕太に「見たいの？ どうしようかな。」

雅史「売ったらいいんじゃないです、2,000円とかで。」

著者「いっすよ、買いますよ。」

裕太に「ううん、いいよ、そんなするな。誰にも見せんなら、持ってっていいよ。(DVDをさして) ウィリーしながら地面に手を突いてるよ。でーじ(とつても)すごいよ。」(裕太に「と雅史との会話 2010年8月12日, アジト)

ここからわかることは、以下の2点である。1つ、雅史にとって著者は部外者で、裕太に「一」にとっては境界者もしくは内部者とみなされていること。かつて、著者は裕太に「一」からステッカーを1,000円で買った経験がある(2007年6月30日)。ここからはお金を徴収しないメンバーになる、つまり金銭的共有がなされることが〈地元〉のメンバーと認められる一つの契機であることがわかる。2つ、雅史にとって、裕太に「一」の財布は「俺たちの財布」との感覚を確認できる。ここからは裕太に「一」が〈地元〉を精神的支柱としてはもちろん金銭的にも支える重要人物であることを確認できる。

これらの俯瞰の視点の獲得は、〈地元〉における社会化によって獲得できるものであり、最終的にも〈地元〉を基軸にして行われるものであることが重要である。広告、メディアによって流布された最新のファッションに魅力を感じつつも、沖縄のヤンキー独自の白いスニーカーや暴走族名のプリントされた特別仕様のヘルメットとブーツが欠かせないとする感覚。財布やバイクの取引価格は市場における適正価格ではなく、〈地元〉における評判によって大きく影響を受けること。また警察による暴走族へのネガティブキャンペーンや取締りも、〈地元〉に帰れば笑い飛ばしていること。ここからは、消費社会や資本主義、支配的社会に大きな影響を受けてはいるものの、〈地元〉にもとづいた俯瞰の視点により、それらの影響を一部緩和するという事実であった。この視点の獲得によって、社会化の真っ最中にある不安定さだけでなく、外部社会の影響による不安定さを一部緩和することが可

能となる。

4.2 小括

〈地元〉における対面的相互行為を通じて、それぞれのメンバーに付与される1回性の「歴史」を蓄積し記憶するために、そして社会化を経験してその後に安定して〈地元〉で過ごすために、資源の存在は大きな役割を果たしている。ここでトランプやダーツマシーンといった、もともとはどこにでもあった資源が、対面的相互行為を支える重要な契機となり、それによって〈地元〉に流れ着いた若者を受け入れ、名前や役割を与え、「歴史」を付与し、一人前の代替不可能な存在へと導いている。

5 現存する資源を有効に使うために、〈地元〉が適切な規模と組織形態にあること——〈地元〉の形成過程Ⅱ

ここまで、〈地元〉のアジトに最低限の資源があることによって、そこで新参者が常連のメンバーへと社会化されていく過程をみた。それらの資源は、もともとは廃棄物であったものやどこでも入手できる流通品である。ただそれらが、〈地元〉のアジトにあることによって、有効な資源へ再利用されていた。仮にそれらは〈地元〉になれば、元々の廃棄物やありふれた流通品に逆戻りするものばかりである。よって、ここでは、それらの現存する資源が有効に使える規模に〈地元〉がある、という2つ目の〈地元〉の形成過程を検証していく。資源があるだけでなく、それが有効に使われ対面的相互行為が営まれることが、メンバーの社会化にとって欠かせないためである。

〈地元〉の規模が小さ過ぎず、また大き過ぎず、適切な規模にあることが、〈地元〉の資源を有効に活かすためには欠かせない。小さ過ぎる場合は、毎晩にわたり暴走族が活動する沖縄では珍しいものの、警察による一斉取締りなどによって、ある暴走族の人数が極端に少なくなる際に生じえる。この場合、一人あたりの資源の割り当ては増大す

るが、それをもとにしたメンバーとの実践を継続し、そこで一人前となることは物理的に難しい。例えば、2・3名では暴走もギャンブルも盛り上がりには欠け、せつかくの資源は無効化されてしまう。ただ、少数のメンバーは隣町の暴走族に暫定的に加わることでこの事態に対処することもできる。他方で大きくなり過ぎる場合は、一人当たりの資源は少なくなり、それを有効に使用してメンバーの代替不可能性を形成することは難しい。どこの誰かわからないメンバーがアジトに入り浸ることは、警察によるアジトの捜査を警戒する暴走族にとって適切な状態ではない。最終的には何らかのトラブルがもとで、〈地元〉の暴走族から追い出される新参者ではあるが、実際には十分な社会化の働きかけを受けることができなかつたためにトラブルが生じるとの解釈が妥当である。

5.1 不安定な〈地元〉——爆音連合の場合

以下では、その社会化がなされる条件をみるために、短期世代型暴走族である爆音連合の社会化に注目する。そこでは上で扱った沖縄連合では到底起こりえない、先輩から後輩への文化の継承が困難な場面を確認できる。

俺も（中学生の時は高校行かずに働けば）バイク乗れると思ったばあよ。けど学校のつまらなさなんて、仕事のきつさと比べればなんとでもなるばあよ。学校がつまらんかったら寝とけばいいやし。（太一 2007年10月31日深夜、B市のローソン駐車場にて）

爆音連合の太一（16歳）は、良哉（中3・15歳）に向かい、このように自らの経験を語った。良哉は卒業する年の秋に、学校教育からの解放と働くことの希望を抱いていた。それに対して、太一は自らも学校がつまらなさから脱却を求めたし、バイクを自由に乗れる魅力を感じたことを良哉に語った。しかし実際の現場のきつさは、学校がつまらなさをはるかに超えるものであった。きつさの対価として得た賃金

も、夢見たバイク免許の取得や購入には到底及ばない。自らの見当違いを素直に後輩へ伝えようとした。しかし、15歳の良哉にはまったく伝わらなかった。彼は「俺にはできる」の一点張りだった²¹⁾。

5.2 小括

2つの暴走族の事例からは、沖組という厳しい就労環境に近くその経験知が先輩によって蓄積され、口述ではなく実地でみさせられる沖縄連合と、想像もできなかった現場の厳しさに飛び込み、その経験を口述によって伝えようとする爆音連合の対照性がみてとれる。そしてこの対照性を、ここでは暴走族組織の年齢構成によって説明を試みる。沖縄連合は、年齢の幅が大きいわりに各世代のメンバーは少ないのに対し、爆音連合は年齢の幅が3・4年で小さいわりに各世代のメンバーは多い。どちらも合計のメンバーは20-30名程度であることを考慮すれば、その差異がそれぞれの暴走族の文化に多大な影響を与えていると推測できる。つまり、前者では新参者は歴代の先輩たちにその実体験にもとづいた知恵や技術を身体に叩き込まれながら一人前になる。またその経過が自らの考えや身体の変化からだけではなく、年齢を重ねるごとに「凄み」を増している諸先輩を日々の実践から直接にみて学び取っている。他方で後者では、その「凄み」を感じることは極めて難しく、また同世代の友人から単なる経験談やエピソードとして語られる。その結果、自ら成功と失敗を繰り返すなかで成長するしかない。最終的には、安定して集うことのできる場所がある沖縄連合では文化継承がある程度成立するのに対して、集合場所が警察や企業の影響を受けやすく不安定である爆音連合では、文化敬称の困難さにおける対照性を確認できる。

6 考察

今までの社会学では、小集団で展開される対面的相互行為の多様性や、その多様な現実を行為者が認識する際に用いる枠組の可変性が議

論されてきた (E. Goffman 1959=1974, D. Diehl and D. Mcfarland 2010). それに対し本稿では、沖縄の暴走族少年たちが文化を継承する対面的相互行為が展開される〈地元〉に最低限の資源があることと、それが適切な規模の集団で有効に用いられることが欠かせないことをみてきた。これらのあたりまえの事実を確認したのは、それらが〈地元〉で必ずしもあたりまえではなくなっているためである。それに従えば、〈地元〉は小集団が解体する臨界状態にあるとの結論が妥当である。

ただこの悲観的かつありきたりな結論からこそ、現代社会の諸問題を議論する前提を確定することもまた可能である。ここでは以下の2点を確認する。1つ、最低限の資源やそれを用いる適切な規模の小集団といった〈土台〉を持たない者が、それを意味や文化といった観念で補うのではなく、持たない者も〈土台〉を固めてから意味と文化を形成しているという事実。2つ、ただその〈土台〉をつくるための資源や適切な規模の集団は、元々は廃棄物や流通品であり、また名前も与えられておらず、ほとんど何もできなかった中学生が〈地元〉の金銭的循環に組み込まれることによって展開される対面的相互行為を介した社会化であるという事実。この2つの事実を確認することで、ありきたりな結論の意義は明確になる。これらの事実は〈地元〉外部の資本主義社会に対抗的でも迎合的でもない。〈地元〉に行き着いた流動的な暴走族少年らに、外部の全体社会を意識する余裕はないし、彼らは同一の何かや、類似の何かによってつながっているのではなく、ただ〈地元〉に流れ着き、集い、そこに最低限の資源とそれを使用する環境を備えた〈土台〉があることで、対面的相互行為が生み出されていた。この〈土台〉によって、同一性や類似性にもとづく共有された文化や意識を形成するには至らなくとも、隣接性の思考によってそれぞれのメンバーは雑多なままに臨界状態で繋ぎ止められていた。

それを本稿では、〈地元〉で展開される新参者の社会化にみた。それはバイク技術のスゴさ(熟練度合)、けんかの強さ、服装や振る舞いがイケているのかといった基準を満たしたうえで、ある役割を担う存在として〈地元〉に配置されることではなかった。そうではなく、著

者がパシリとして加わるなかでみえてきたのは、名前さえも与えられていなかった新参者の中学生が、上のような過程を経た結果、一人前の代替不可能な暴走族少年になっていく社会化の過程であった。結果的にある役割を担うことになったとしても、それは個人の能力によってではなく、〈土台〉に支えられた対面的相互行為を通じて新参者が社会化された結果、身に付いた能力にもとづく配置であった。

最後に、ここまでみた〈土台〉は対面的相互行為にもとづくメンバーの社会化を支えているのであって、それは変革をめざす階級意識を醸成する土台ではない。そのような土台からさえも排除された若者の生き様があるのみである。ここからは、それをも解体する諸相への批判的考察が求められる。本稿はその始点に立ったに過ぎず、彼らの生き様から、学ぶべき点はなお山積している。

[注]

- 1) 本土と沖縄には、歴史的／文化的に異なる背景があり、いまだに両者の間には非対称な関係がある。それにもとづけば、沖縄を日本の一部とみなす本土という概念ではなく、独立した概念として扱い両者の非対称な関係性を考察する必要がある。ただ本稿では小集団研究の文化継承に焦点をあてており、誤解を避けるために本土という表記を限定して用いることとする。
- 2) 沖縄には離島や僻地を除くすべての公立中学校に代々と受け継がれる暴走族が存在する。
- 3) 季節労働とは、北海道や東北地方の農家が仕事のない冬季に都会へ出稼ぎに出ることである。ただ今日の沖縄のヤンキーは、慢性的な失業状態ゆえに、季節によらず年間を通して本土で働いている。彼・彼女らは、その就労形態を「キセツ」と呼ぶ。
- 4) 〈地元〉は調査中に出会った暴走族少年らの用語法にもとづいている。
- 5) 暴走族少年の暴走をみせる対象は、ギャラリーの少女たちであったり、特定の所轄の警察や、地元の先輩であったりと多様である。それ

によって、目的も彼女をみつけること、鬱憤をはらすこと、地元で名前をあげることと多様である。またギャラリーも、時間つぶし、ナンパ、恒例のイベントだからなどといった多様な動機で集まる。ただ、このような動機も背景も異なるお互い顔見知りの暴走族とギャラリーではあるが、時に団結して暴動へと発展することもある。

暴走族の身柄を確保しようと署員がパトカーを降りた際、周辺にいた期待族約 100 人がパトカーを囲み、罵声を浴びせ、立ちふさがり捜査を妨害した。署員らは身に危険を感じ、やむなく現場から離れたという。(『琉球新報』2002. 3. 25)

- 6) ただ調査当時に、裕太に一の 1 歳下の 27 歳で、しかも広島出身の大学生であった著者がいわゆる沖縄の〈地元〉の中学生と同様の扱いでパシリになれたわけではない。最初は「奇妙な部外者」とのラベルを貼られ、それを緩和すべく、すべての成員とのラポール形成のために、積極的に雑務をこなすなかで、通常とは異なるパシリになることができた。
- 7) この他に調査を進めるにあたって留意した点は、組織内のヒエラルキーで下部に位置づけられる成員から関係をつくることであった。それは下部の成員によって上中部の成員に紹介され、それらの成員と関係をつくることはできても、その逆は極めて困難であるためである。またラポール形成において、パシリとしてのしくじりが有効であることを理解した後でも、意図的にしくじったことは一度もないことは明記しておく。
- 8) 沖縄の暴走族は、15 年ほど前までは縄張り意識も強く、よその暴走族に加わったり、合同で暴走したりはもちろん、隣町に行くのも難しかったとされる。ここから、これらの類型の移り変わりを確認できる。おれらが 10 代の頃は、縄張り意識強くてからに、今みたいに(暴走族同士が)仲良く走ってなかったよ。隣町とかも行けんかった。沖縄市に制服取りに行くのもこわかった(裕太に一に 2011 年 8 月 11 日、アジト)。
- 9) 男性中心的、上下関係重視、地元重視といった価値規範と、独特の

ファッションや用語が特徴的な日本の若者文化のひとつ。

- 10) ここで〈地元〉からあふれるといっても沖縄の場合は必ずしも、本土で行われる暴走族脱退時の制裁的リンチのない、単なる他の暴走族の〈地元〉への移動といった形がとられることが多い。その要因は集団の外部と内部における事情から説明できる。まず、沖縄では学校教育や就労世界（地元建築業除く）などの外部社会への包摂的働きかけがほぼないため、また残ったメンバーは脱退したメンバーに待ち構えている社会の厳しさを知っているため、「裏切られた」との感覚は生じず、むしろ心配されるほどである。
- 11) 〈地元〉における対面的相互行為は、メンバー間のお金のやりとりとその文化的世界からのアプローチが有効である。なぜなら、資源があるからといって必ずしも〈地元〉が順調にまわるわけではないが、最低限の資源がないと〈地元〉をまわすことは不可能であるためである。ただその資源もあらかじめ定まった目的と役割を持ったものではなく、廃棄物や流通品であったものばかりである。分析にあたっては、K. Marx と F. Engels の議論を参照した (K. Marx and F. Engels 1846=2002)。
- 12) 「にーに」とはうちなーぐちで兄さんの意味。アジトで名前に敬称を付けて呼ばれるのは彼だけであり、敬称が呼称の一部となっているためここでもそのように表記する。
- 13) より詳細に記すと、彼は土曜の深夜に後輩の暴走を手伝った後でも、日曜の朝から開催される娘のピアノ発表会に参加する。また後輩の手伝いのみで彼は暴走していないことを彼女が確認するために彼の携帯電話にはGPS機能が付与されている。これらの条件をのむことで、彼はある程度の小遣いと遊べる時間を配偶者から与えてもらっており、それが〈地元〉の資源を調達する基礎となっている。なおピアノ発表会への参加やGPS機能の付与は、男性中心であるヤンキー・サブカルチャーの世界では、異例の出来事である。
- 14) 以前、シャッター前で喫煙していた新参者は、裕太ににーに蹴りを入れられアジトへの出入りを禁止された（2009年6月9日深夜、ア

ジト).

- 15) 「(差し入れをする著者に) 悪いけど、ギャンブル (でもらうお金) は、これとは別だからね。[わかってますよ]」(裕太に一に 2010 年 8 月 21 日, C 市の建築現場)。

ここからわかるように、ギャンブルで動くお金と、倉庫代やその他の経費はまったく別物と考えられているからこそ、結果としてこの均衡は無意識のうちに保たれている。敗者が勝者に軽食代を要求したり (勝者が振舞うのは問題ない)、先輩がギャンブルで意図的に後輩から倉庫代を徴収したりするなら、ギャンブルの興奮とその後の敗北感、達成感は一気に消滅するだろう。

- 16) 沖縄の暴走族には、SCS とは異なり年齢階梯を覆すようなギャンブルがある。その要因として、SCS で描かれる定常的な都市下層と比較して、沖縄の暴走族は流動的で不安定であるため、覇権争いをするだけの余力がないことが挙げられる。SCS では能力やチーム内での覇権争いによって、トップを争うのに対して、沖縄では時間と労力をかけてトップを含めたメンバーの社会化で精一杯である。

- 17) 森永のコーヒー牛乳をおいしく感じるとみせることが、沖縄連合の通過儀礼のひとつである。炭酸飲料を飲んでいて新参加者が数年後にはコーヒー牛乳を積極的に注文するようになる。これは、小集団内の価値が味覚という身体のレベルを介して共有される過程であり、集団内の規範、メンバーの一体感を共有するものとなっている。

(トランプ中に、後輩から電話がかかってくる) おう、飲物頼むわ。(アジトにいるメンバーにむかって) 飲物いる人? 1, 2, 3, …8 人な。打越は? [炭酸系たのんでいいっすか?] だめ。ここ (アジト) では森永のコーヒー牛乳以外ないよ。[わかりました。じゃあそれお願いします。](後輩が到着して、みんなで飲みながら) だー、うまいでしょ? [はい、おいしいです] (裕太に一に 2009 年 6 月 10 日深夜, アジト)

- 18) 著者も調査中に、この通過儀礼を受けた。ある晩、私は暴走する拓也に遭遇し、パシリとして暴走を盛り上げる役割を真摯に遂行しよう

と考え、交差点で「たくやー！」と声援を送った（2007年6月30日深夜、C市の国道交差点）。その出来事は後日、彼が「(名前を叫ぶ声援は) あふあーだった(大変でびっくりした)」とみんなが集まるアジトで笑い話として語った。彼は、その晩に顔を隠すマスクこそしていなかったものの、パトカーやそれに装着したカメラの位置を把握することで顔を隠して逃亡していたと後日語った。そうすることで、警察対策とギャラリーへのアピールが同時に可能となる。しかしその意図を、私はその場で理解できず、彼が顔を隠していないなら、私が拓也である事をきちんとわかって見物していることを彼に伝えたかったし、またそれを他のギャラリーにも知らせようと考えていた。そしてこのエピソードは、その後も頻繁に（特に初めて会う先輩に私を紹介してくれる時などに）語られるもののひとつとなっていくた。

- 19) 「危ない」人間関係とは、具体的には暴力団との関係をさす。裕太に一にや暴走族少年の多くは、暴力団との接触を避けており、著者も頻繁に注意された。それにもとづき、ここでは「危ない」との表現を用いた。
- 20) 「良夫は、あしばー(暴力団)の知り合いたくさんいるよ。[良夫、あぶなっかしいですね。大丈夫ですか?]あいつは大丈夫、できんよ。[そうなんですか、どういうやつが、あしばーになるんですか?]あしばーは本当のワルか、ほんとの馬鹿にしかできん」(裕太に一に2010年8月21日昼休み、C市の建築現場にて)
- 21) 2007年当時、そのように語った彼は、卒業後から現在まで鳶として働き続けている。その点で、彼個人の例でいえば成功例といえるかもしれない。ただあくまでもここでは、爆音連合の組織の形態により、彼が経済的な自立をしたのではなく、個人として行われたものである。よって、生活や雇用を一部保障する沖縄連合と比較して、爆音連合は不安定である。

[文献]

Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge, U.K.: Polity Press. (=

- 2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店.)
- Diehl, David and Mcfarland, Daniel, 2010, “Toward a Historical Sociology of Social Situations”, *American Journal of Sociology*, Vol. 115(6): 1713-52.
- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, U.S.A.: Anchor. (=1974, 石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房.)
- MacIver, Robert Morrison, 1917, *Community, a Sociological Study: Being an Attempt to Set Out the Nature and Fundamental Laws of Social Life*, London: Macmillan. (=2009, 中久郎・松本通晴訳『コミュニティー——社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』ミネルヴァ書房.)
- Marx, Karl and Engels, Friedrich, 1846, *Die deutsche Ideologie*. (=2002, 廣松渉編訳／小林昌人補訳『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』岩波書店.)
- , 1934, *Zur Kritik der Politischen Okonomie: Erstes Heft*, Moskau: Verlagsgenossenschaft Ausländischer Arbeiter in der UdSSR. (=1956, 武田隆夫ほか訳『経済学批判』岩波書店.)
- 打越正行, 2008, 「仕事ないし, 沖縄嫌い, 人も嫌い——沖縄のヤンキーの共同性とネオリベリズム」『理論と動態』1: 21-38.
- , 2009, 「植民地沖縄におけるネオリベリズムと反抗——ヤンキー・サブカルチャーズ研究序説」『部落解放』15: 73-90.
- , 2010, 「〈地元〉の不変性とダイナミズム——〈地元〉周縁に生きる沖縄の下層若者から」『理論と動態』3: 19-37.
- , 2011, 「型枠解体屋の民族誌——建築現場における機械的連帯の意義」『社会学批評』別冊: 21-44.
- Wellman, Barry, 1979, “The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers” *American journal of Sociology* 84: 1201-31. (=2006, 野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』野沢慎司・立山徳子訳「コミュニティ問題——

イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」勁草書房, 159-200.)
Whyte, William Foote, 1943, *Street Corner Society: the Social Structure of an Italian Slum*, Chicago: The University of Chicago Press. (=2000, 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣.)

(うちこし まさゆき・社会理論・動態研究所)

Succession Processes of Okinawan *Bosozoku* Cultures and *Jimoto*

Through Participant Observation Attended as Errand Boy

UCHIKOSHI Masayuki

Institute on Social Theory and Dynamics

karp@mail.goo.ne.jp

In sociological small groups studies, diversity of face-to-face interaction and variability of frame which actors use in recognizing the diverse realities have been discussed. On the other hand, in this thesis we focus on the point that face-to-face interactions are supported by resources in the group and its scale. Therefore we reveal that diversity of face-to-face interactions and variability of frame are determined by *base*, resources in the group and its scale.

Now Okinawan *Bosozoku* youths do not necessarily have stable foundations in family, school and region. In addition, they are treated as frequent labor forces in labor market. *Bosozoku* is a motorcycle gang group in Japan. Based on succession processes of cultures in *Jimoto*, we inspect the process that *Jimoto* they finish becomes *base* furnishing resource and scale supporting face-to-face interaction. *Jimoto* is a place they survive with regular members at fixed periods.

First we aim at bare resources in *Jimoto* for they gather there, and practice some activities. For them finishing in *Jimoto*, before sharing cultures and narratives, resources are necessary for continuously gathering there. Next for using them usefully, we aim at appropriate scale of *Jimoto*. Those resources were originally off-scourings in capitalist society or ubiquitous goods in

circulation, but in *Jimoto* are useful. Consequently if the scale is not appropriate, those resources become invalid again. Ultimately we confirmed that their face-to-face interactions are supported by *base* furnishing material resources in *Jimoto* and its scale.

Key words: *Bosozoku*, *Jimoto*, Okinawa